



Voice

Professional 1

藤野寿美さん profile ふじの・すみ
1959年千原町生まれ。大区画は場整備後の転作田で小菊を栽培して10年。雇員型農業経営に取り組む。
JAいわて平泉花き部会 小ぎく専門部長

「ありがたさ」を感じる心を忘れずに

「早くに夫を亡くし、地域に助けられた。人とのつながりが私を支えている」と話す寿美さん。

同年代の農業経営者が少ない中、地域農業や農地をどうやって受け継ぐべきかを考える。ヒントの一つは仲間づくりにあるという。年2回、20年以上仲間同士で発刊している「かあちゃん新聞」。農業を通じて知り合った女性から記事を集めて編集している。

「今でいうブログやフェイスブック」と冊子を広げる。総勢20人の近況がズラリ。離れていても気持ちはつながっていると笑う。

かつての農村は教育、福祉、介護が同居していた。農業を通じ、今の農村に合った人とのつながりを生み出すことが大事と力説。

「農業は結果がものをいう。女性同士のつながりを礎に自分を磨いてほしい」と農業女子を励ます。

農業は「ものがたりのある、ものづくり」。経験から得た秘訣を、プロフェッショナルに聞いた



Voice

Professional 2

葛西信昭さん profile かさいのぶあき
1958年川崎町生まれ。大学で畜産を学び1981年就農。仕入販売業を経て2003年かさい農産を設立。
有限会社かさい農産 代表取締役会長 県農業農村指導士

夢を追いながら、とことん現実的になる

「人はおいしいものを食べると笑顔になる。農業は人を笑顔にさせる仕事」と表情豊かに語る信昭さん。

生産して終わる農業ではなく、販売を意識した生産を心掛けている。「同じ商品でも、詰める袋のサイズが違えば値段が変わる。小袋はたくさん欲しいが、大袋なら不要という声も。多くの情報の中からニーズを見極める目が大事」と強調する。

安全な商品づくりが求められる

現代。生産工程を管理するGAP (Good Agricultural Practice)の導入など、目に見える安全性の導入など、買う側の視点を重視する。

従業員のほとんどが女性。「目線や発想力に驚かされる。前向きな考え方に背中を押されることも多い」と評価。女性にとって働きやすい職場を目指している。

「努力する人間を運命は裏切らない。思いはかなう。頑張ってほしい」と農業女子にエールを送った。

地の恵みに人の知恵を

高齢化、後継者の他産業への流出、少子化、農村の過疎化など、地域の農業が抱える問題は根深い。農業女子という若いエネルギーだけでは解決できないことは多い。

また、農業が果たす役割は多様。食の供給、景観もたらす癒やし、水源の確保、土壌の流出や洪水を防ぐダム機能など、国土を保全する手段でもある。その価値は、年間約8兆円と試算される。なくてはならない産業であることは揺るがない。

では、どうやって地域の農業を次の世代に引き継げばよいのだろうか。

吉報は二つある。農業を選択する若者たちが増えているという事実。そして、美しい緑の山々、清らかな水と清浄な空気。一関は山の幸豊かな地の恵みの宝庫だということだ。これに先人と若人の知恵を加えれば、付加価値が生まれる。それこそがイノベーション。可能性は無限大。一関の農業には未来がある。

CloseUp.2

農業女子の可能性

2010年時点の農業就業人口は、全国で男性130万6千人、女性130万人とほぼ同数。女性が経営に参加している農家ほど農業所得が高いと言われ、経営の多角化に取り組み事例が多い。今までの延長では農業を成長産業にすることは難しい。必要なのはイノベーション(変革)だ。



「女性農業者等オペレーター育成研修会」で刈り払い機や動力噴霧器の使い方を学んだ。



カフェで行われたコミュニティラジオの収録。農業への熱い思いはFMあすもで6月27日に放送された。

農村の元気を再発見

今年から始まる「県南農業女子プロジェクト」の狙いは3つある。①スキルと存在感を高め、地域に認知されること ②仲間づくりを進め、多彩な活動を自ら行うこと ③農村の魅力や生き生きと暮らす姿を地域内外に発信することだ。市内または平泉町で農業を営む45歳以下の女性が対象。ぜひ参加して農業女子同士の横のつながりを強めよう。



斎藤真理子

さいとう・まりこ

一関農業改良普及センター 主任農業普及員

「県南農業女子プロジェクト」への申し込みは下記まで。
☎@4961、FAX@4965

Central Figure

希望と悩みを共有できる仲間づくりをバックアップ

一関農業改良普及センターでは、昨年、普段集まる機会のない一関市と平泉町の農業女子を集めたセミナーを行いました。

彼女たちは、育てる作物や就労の形態が違って共通の話題が多い。和やかに会話を弾ませていました。

今年はスキルアップのためのセミナーや料理教室などを意見交換しながら企画します。また、女性の目線で見つめた農業の魅力をコミュニティFMや紙媒体を使って発信。話題を共有できる仲間づくりと、農村で元気に働く女性を全力で応援します。